JEFF BECK GROUP
(with TERRY BOZZIO, TONY HYMAS)
BAD ENGLISH STEVE LUKATHER BAND

Aug. 5th & 6th

TOWER OF POWER

SPECIAL GUEST Aug. 9th, 10th, 11th & 12th

CHUCK BERRY

SPECIAL GUEST Aug. 12th

RICHARD MARX

UDO ARTISTS PRESENTS
IN COMMEMORATION OF THE 20th ANNIVERSARY

KIRIN"BEER'S NEW GIGS"'89

JEFF BECK GROUP
(with TERRY BOZZIO, TONY HYMAS)
BAD ENGLISH　STEVE LUKATHER BAND

Aug. 5th & 6th
TOWER OF POWER

SPECIAL GUEST Aug. 9th, 10th, 11th & 12th
CHUCK BERRY

SPECIAL GUEST Aug. 12th
RICHARD MARX

東京 8月 5 日 有明コロシアム
8月 6 日 有明コロシアム

出演●ジェフ・ベック・グループ、バッド・イングリッシュ、
スティーヴ・ルカサー・バンド、タワー・オブ・パワー
主催■東京放送　後援■Jwave

大阪 8月 9 日 大阪城ホール
8月10日 大阪城ホール

出演●ジェフ・ベック・グループ、バッド・イングリッシュ、スティーヴ・ルカサー・バンド、スペシャル・ゲスト★チャック・ベリー
主催■毎日放送　後援■FM802

横浜 8月11日 横浜アリーナ
8月12日 横浜アリーナ

出演●ジェフ・ベック・グループ、バッド・イングリッシュ、スティーヴ・ルカサー・バンド
スペシャル・ゲスト★チャック・ベリー、〈12日のみ出演〉リチャード・マークス
主催■東京放送/TVKテレビ　後援■Jwave
運営■ウドー横浜

提供●キリンビール株式会社

名古屋 8月 7 日 愛知県体育館

出演●ジェフ・ベック・グループ、バッド・イングリッシュ、
スティーヴ・ルカサー・バンド
主催■中部日本放送

招聘・制作●ウドー音楽事務所
協賛●EPIC・ソニー／CBS・ソニー／アルファ・レコード
ワーナー・パイオニア／東芝EMI

ake／Meg

4世代ギタリストの競演といえる、素晴らしい顔ぶれのギグ'89

福田一郎
Ichiro Fukuda

例年8月は、取材を兼ねてアメリカにでかける。しかし今年は、暑い東京にいたほうが、ずっと収穫がありそうである。この夏アメリカでは、面白い映画が目白押しのにぎやかさで上映中であるが、コンサートに関するかぎり、興味をそそられるものが、ほとんど見当たらない。噂されたポール・マッカートニーのツアーは、いまもって噂の段階を出ていない。9月から始まるローリング・ストーンズのツアーにしても、ニューヨーク、ロサンゼルスに回ってくるのは、秋も10月以降になりそうである。

ところが、この夏、東京、横浜、大阪、名古屋には、素晴らしい顔触れの"ニュー・ギグ'89"がある。それは昨年の"ギグ'88"をはるかに上回る魅力的な顔触れである。顔触れだけではない、音楽的にコンセプトを持ったコンサートだといえる。ギター・オリエンテッド・ロック・バンド、3バンドのデモンストレイションと4世代の名ギターリストの競演という、実に興味ある魅力的な内容である。

メイン・アクトはジェフ・ベック・グループである。次いでバッド・イングリッシュ、スティーヴ・ルカサー・バンドというラインアップである。それに加えて、会場によって出演は異なるが、スペシャル・ゲストのチャック・ベリー。ヒューイ・ルイスのワールド・ツアーに参加したベイ・エーリアのファンク・バンド、タワー・オブ・パワー、90年代のニュー・ヒーローといわれるリチャード・マークスがゲスト出演する。

かなり荒っぽく世代別をすると、ジェフ・ベックは、1960年代を代表するもっとも優れた、影響力の大きいロック・ギターリストの一人。次ぎに、今年結成されたばかりのバッド・イングリッシュのギターリスト、ニール・ショーンは、70年代を代表するギターリストの一人。ティーンでサンタナに加入して注目を集め、その後スーパーグループ、ジャーニーでのニールの活躍は、ファンの記憶に新しいところである。

スティーヴ・ルカサーは、人気グループ、トトのギターリストとして、あまりにも有名。遊び仲間がバンドを組んだ、いわゆるガレージ・バンドからプロになったトトの結成は77年。しかし、彼らが広く認められたのは、80年代に入ってからで、したがってスティーヴ・ルカサーを、80年代を代表する優れたギターリストの一人として上げることができる。

そしてチャック・ベリーである。ジェフ・ベックに始まり、ニール・ショーン、スティーヴ・ルカサーたちに大きな影響を与えたロック・ギターリスト、というよりは、"ダディ・オブ・ロックンロール"と呼ばれ、すべてのロックンローラーに影響を与えた偉大な存在である。言い換えると、"ニュー・ギグ'89"には、50年代から80年代にかけて、それぞれの年代を代表するギターリストが一人ずつ揃っていることになる。

そしてギターリストではないが、リチャード・マークスは、90年代の新しいスターといっていい注目すべきロック・ミュージシャンの一人である。今年の出演者が、顔触れからも、音楽的にも、昨年よりずっと魅力的であるというのは、十分にお分かり頂けるだろう。

実際のステージ進行などについては、ほとんど何も知らないが、チャック・ベリーは、ジェフ・ベック・グループのセットで、客演の形で登場するらしい。となると、アンコールで、ニール・ショーン、スティーヴ・ルカサーたちの飛び入りも期待でき、どんな大ロックンロール・セッションになるか、今から楽しみである。

今年のプログラムは、ウドー音楽事務所創立20周年記念をも兼ねている。そして個人的な思い出で、なんとも申し訳ないのだが、こちらにとっても、ロックンロール・ミュージックに関わり合いを持つようになって30数年、今年の出演者たちとは特に関わり合いがあり、なにかと思い出の多いアーティストたちの来日で、感慨も深い。

例えば、ジェフ・ベックに関して言えば、丁度20年前の69年7月、ニューポート・ジャズ・フェスティバルで、初めてベックの演奏を客席で聞いている。この年のジャズ・フェスティバルは、その前年あたりから台頭してきた新しいロック・グループ、とくにブリティッシュ・ロック・グループ、ジェスロ・タル、テン・イヤーズ・アフター、ジェフ・ベック・グループなどの出演で話題となった。

当時のジェフ・ベック・グループは、ボーカルがロッド・スチュワートのもっとも初期の編成。超満員の会場で聞いた、ジェフのギター・サウンドのあまりの美しさに驚かされたものである。そのときの感激は、いまでも記憶に鮮明に残っている。その後、ロンドンで一か月ほど遊んでいたころ、新しいジェフ・ベック・グループをラウンドハウスで聞き、BBA時代には、武道館公演の司会をしたこともある。

ジャーニー、トトに関しても思い出は多い。全米ツアー中のジャーニーとボストン空港で落ち合ったり、トトの取材では、メンバー全員が賑やかに現われ、しっちゃかめっちゃかな取材になったりなどと楽しい思い出がある。そうした思い出話を書き続けていったとしたら、いくらスペースがあっても足らない。

それにしても、ジェフ・ベック、バッド・イングリッシュ、ルカサーと揃い、しかもタイミングよく、それぞれがニュー・アルバムを出したばかりというのは興味深い。たまたまそうなっただけかもしれないが、偶然にしても、なんとも素晴らしい偶然である。

ところで、関係者に聞いた話であるが、ウドー音楽事務所としての最初の興行は、イギリスの人気グループ、マンゴ・ジェリーだったそうである。たしか、かなり入りの悪いコンサートだったと記憶している。もし、そのとき、有働社長が、ロックはこりごりと、そこで手を引いてしまったとしたら、今日のウドー音楽事務所は存在しなかったと断言できる。とすると、今度のギグのような素晴らしいロック・イベントは、多分実現しなかったに相違ない。

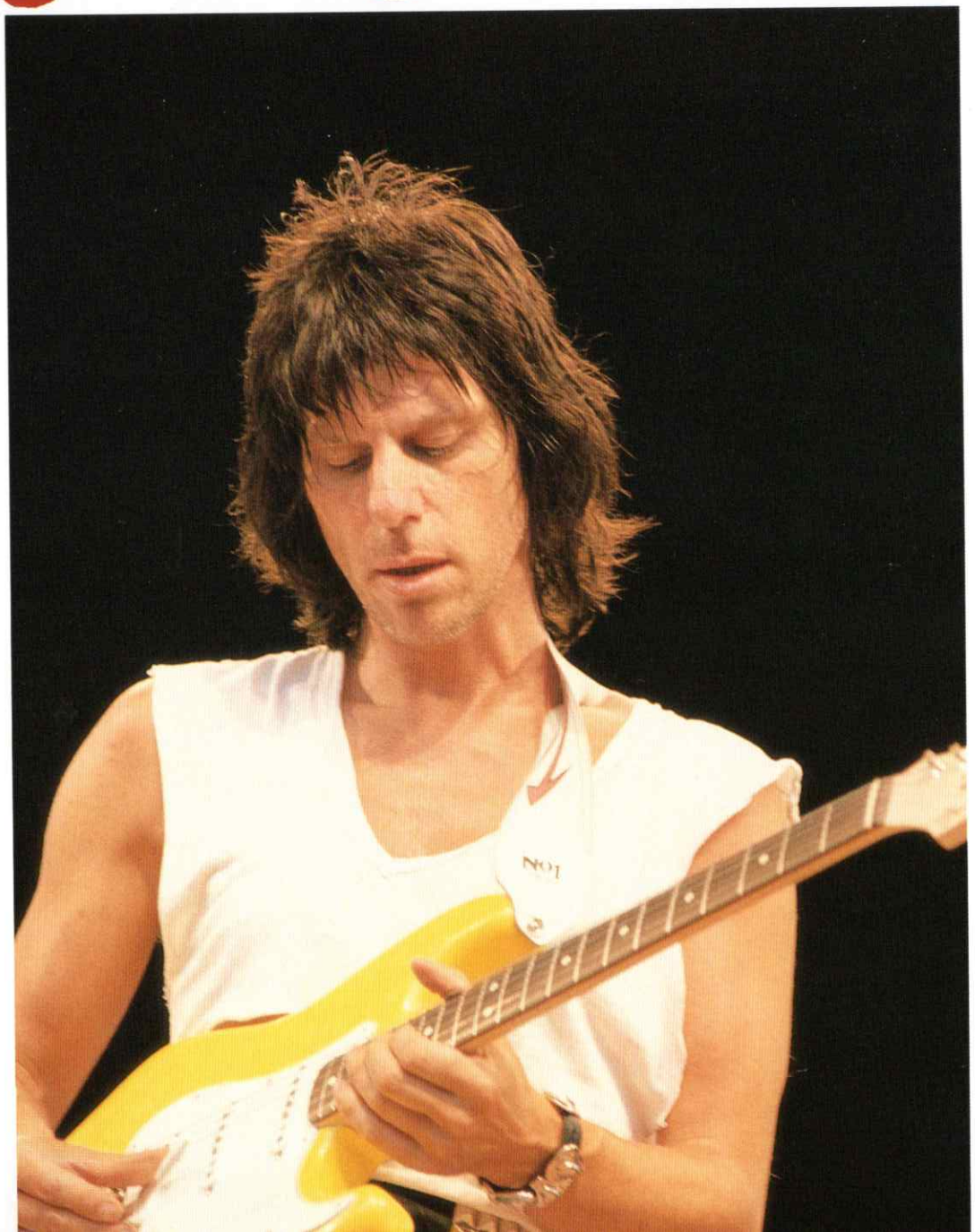
一口に20年といっても、実に長い。5年が、いや3年が一昔くらいの早さで激動するこの業界で、ロックの歴史の流れとともに、堅実にコンサート・ビジネスを続け、成功を積み重ね、着実に発展を続けてきたというのは、並大抵のことではない。成功の最大の原因は、ファンを常に意識し、アーティストたちに誠意を持って接してきたというところにあり、ここにウドー音楽事務所の素晴らしさがある。

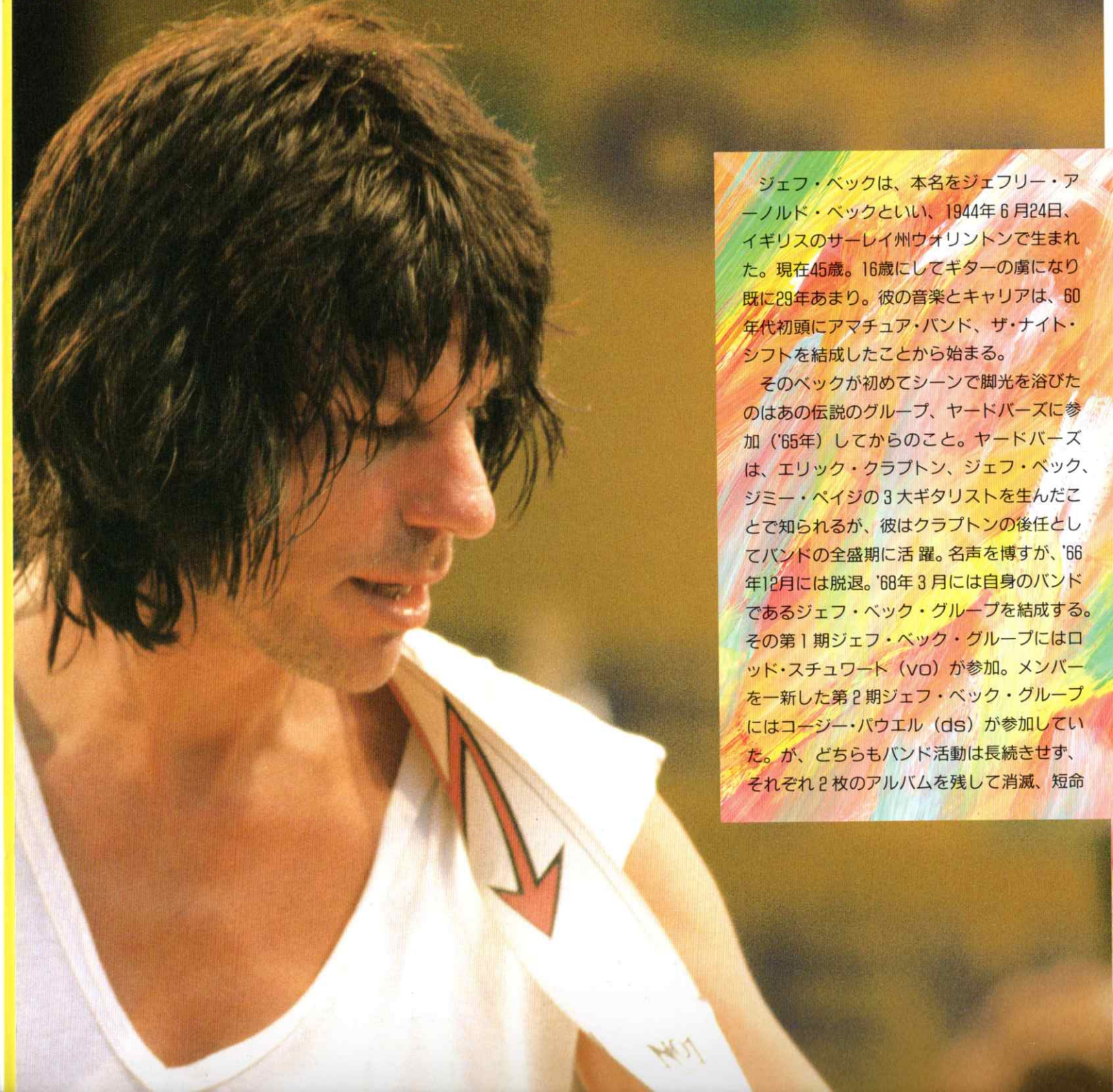
今度の"ニュー・ギグ'89"に関しても、何人かの有名ギターリスト、ロック・ミュージシャンたちから、自発的に参加が申し込まれたという話である。リチャード・マークスのように、アメリカでのスケジュールを調整、一日でも早く来日して、横浜公演だけでも出たいという殊勝なアーティストもいる。

これも、有働社長を初めとするウドー音楽事務所への、世界中のロック・アーティスト、マネージメントからの信頼によるもので、こうした両者の相互信頼関係が続くかぎり、来年、再来年と、真夏の"ギグ"は、ますます充実して、興味深いイベントとなるに相違ない。

and Tony Hymas

JEFF BECK
Guitars
TERRY BOZZIO
Drums
TONY HYMAS
Keyboards





ジェフ・ベックは、本名をジェフリー・アーノルド・ベックといい、1944年6月24日、イギリスのサーレイ州ウォリントンで生まれた。現在45歳。16歳にしてギターの虜になり既に29年あまり。彼の音楽とキャリアは、60年代初頭にアマチュア・バンド、ザ・ナイト・シフトを結成したことから始まる。

そのベックが初めてシーンで脚光を浴びたのはあの伝説のグループ、ヤードバーズに参加（'65年）してからのこと。ヤードバーズは、エリック・クラプトン、ジェフ・ベック、ジミー・ペイジの3大ギタリストを生んだことで知られるが、彼はクラプトンの後任としてバンドの全盛期に活 躍。名声を博すが、'66年12月には脱退。'68年3月には自身のバンドであるジェフ・ベック・グループを結成する。その第1期ジェフ・ベック・グループにはロッド・スチュワート（vo）が参加。メンバーを一新した第2期ジェフ・ベック・グループにはコージー・パウエル（ds）が参加していた。が、どちらもバンド活動は長続きせず、それぞれ2枚のアルバムを残して消滅、短命に終わる。その後、カーマイン・アピス（ds, vo）、ティム・ボガート（b,vo）とともにベック・ボガート&アピスを結成。このバンドでの初来日（'73年5月）も実現したが、またもや短命に終わり、'74年5月に解散。ベックが自身のバンド活動を続けたのは、ここまでだった。

やがてソロでの活動を開始したベックは、『ブロウ・バイ・ブロウ～ギター殺人者の凱旋』（'75年）や『ワイアード』（'76年）といった傑作アルバムを次々と発表。また、スタンリー・クラークとの交流を深めたり、ローリング・ストーンズ参加の噂が流れるなど、何かと注目を集めたが、ソロ第3弾『ライヴ・ワイアー』（'77年）から第4弾『ゼア・アンド・バック』（'80年）に至るまで3年半のインターバルがあり、その間はあまり派手な活動をしていなかった。

80年代に入って以降も自由気ままな創作活動を続けていたベックだが、その彼が精力的に動き出したのは'84年に入ってから。旧友ロッド・スチュワートやティナ・ターナー、ハニードリッパーズなど数多くのセッションに参加。大きな話題を呼び、そして、'85年6月には5年ぶりのソロ第5弾『フラッシュ』を発表。翌'86年2月には同アルバムでグラミー賞の最優秀ロック・インストゥルメンタルを獲得した。また、この年の6月には5度目の来日公演も実現したが、その後はまたシーンから遠ざかり、'87年にミック・ジャガーの2枚目のソロ・アルバムに参加したほかは、沈黙を続けていた。

そして、'88年暮れ、映画「ツインズ」のサ

様々なバンドで演奏を重ね、音楽経験豊かなドラマー、テリー・ボジオは、今やジェフの強力な相棒だ。彼は奨学金を得て大学で勉強しながら、サンフランシスコの音楽シーンに於いて活動を行ない、卒業後、1年半ほどロック・ミュージカル〝ゴッドスペル〟の仕事を手がける。

サンタナの兄弟バンド、アズテカでの演奏を経て、1973年フランク・ザッパ率いるマザーズ・オブ・インヴェンションの一員となり、3回のワールド・ツアー及び8枚のアルバムに参加し、活躍する。その後、ブレッカー・ブラザーズとの共演などでザッパとの仕事を離れていき、78年にはマーク・アイシャムと〝グループ87〟を結成、アルバムをCBSから1枚発表する。そして翌年にはビル・ブラッフォードの後釜としてイギリスのロック・バンド、UKに参加した。

1980年になって、テリーは当時の奥様デイルらとミッシング・パーソンズを結成。自主制作シングルを25万枚売り、キャピトルと契約を交わしたこのグループは、世界的なツアーと3枚のヒット・アルバムに続き、LP『SPRING SESSION M』を100万枚以上売り、大成功を収める。だが1986年に解散。

その後、ロビー・ロバートソンのアルバムへの参加を経て、87年11月にはジェフ・ベックの招きで、ミック・ジャガーのビデオ〝スローアウェイ〟で演奏する。そして、88年になって、ジェフ、トニーと共にアルバム『ギター・ショップ』の制作に入り、力強いドラミングを披露。

TERRY BOZZIO
テリー・ボジオ(Ds)

1978年のジェフ・ベックの日本公演に同行し、素晴しいキーボード・プレイでベック・サウンドを支えたトニー・ハイマスは、ロンドンのロイヤル・アカデミーでクラシックの教育を受け、才能を発揮するようになる。その後、ロンドンを基盤とするバレエ団の副音楽部長を務めるが、ポピュラー・ミュージックにも目覚め、ベックを皮切りに、クレオ・レーン、ジャック・ブルース・バンド、スタンリー・クラークらと共演する。

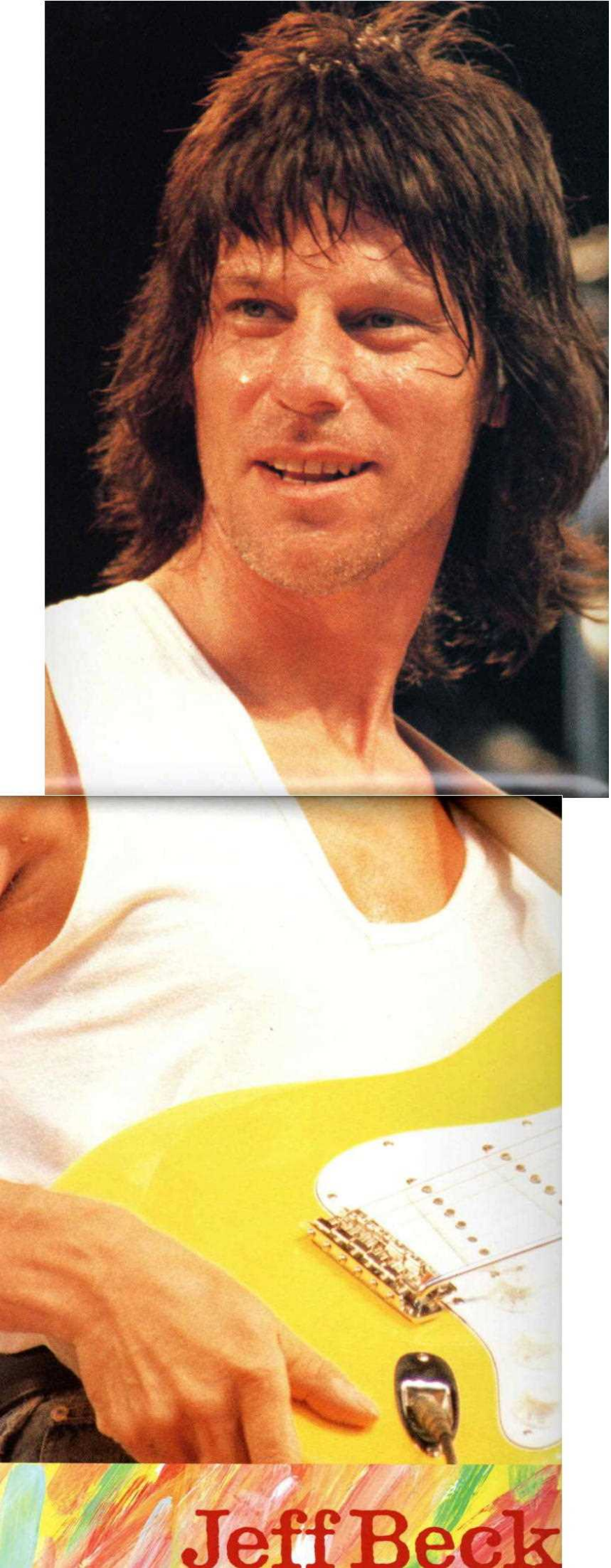
ジェフ・ベック・グループの一員として、78年にサイモン・フィリップス、スタンリー・クラークらと来日した後、トニーは1980年に発表されたベックのアルバム『ゼア&バック』に参加。ソングライター&パフォーマーとして大いに貢献し、日本、ヨーロッパ、全米ツアーにも同行した。1981年には自身のグループ、PHDを結成して2枚のアルバムを発表、又、『FLYING FORTRESS』というソロ・アルバムも発表し、喝采を浴びた。

ロック、ポップ、ジャズ・シーンでの活動と平行して、トニーはBBCラジオでストラヴィンスキー、モソロフや現代の英国作曲家の作品を名ピアニストとして演奏したり、チェンバロ・アンサンブルの一員として活動する他、バレエの作品を手がけるなど幅広い分野で多才振りを示している。

そして、1988年夏頃から、ジェフ、テリーとアルバム『ギター・ショップ』の作曲とレコーディングを開始し、この強烈なトリオのまま来日となった。

TONY HYMAS

トニー・ハイマス(Key)



Jeff Beck

古典的なギター・ダンディズムを保ち続けるギタリスト

渋谷陽一 *Yoichi Shibuya*

何しろレコード発売も来日の発表も余りに突然だったので、こうやって彼の演奏を、しかも新曲をコンサートで聞く事ができるという実感がなかなかわいて来ない。一口に4年ぶりの新作というが、スプリングスティーンやスティーヴィー・ワンダーの新作が4年ぶりに出たというのとは違うのだ。スプリングスティーンなどの場合は、やれ曲ができたのだの、スタジオに入っただの、いろいろなニュースが極東の島国に居る我々にも伝わって来る。たとえアルバムが発表されなくてもアーティストが健在なのは解るし、いつか新作が発表されると安心していられる。ところがジェフ・ベックの場合、ニュースらしいニュースは全くなく、それこそ生きているのか死んでいるのかさえ解らない。そんな状態が4年も続くと、ファンの方も、ひょっとするとベックの新作はもう二度と聞けないのではという気分になって来てしまう。だいたい昔からベックは病弱だったし、2枚アルバムを作るとすぐにバンドを解散してしまうくらい気まぐれなので、全く信用できないのだ。このコンサートに来ているのは、きっと年季の入ったベック・ファンが多いと思うので、僕の気持ちは解ってもらえるだろう。それだけに新作が発表され、それが期待どおりの内容でしかも来日コンサートまで実現した時の喜びは何ものにも替えがたい。

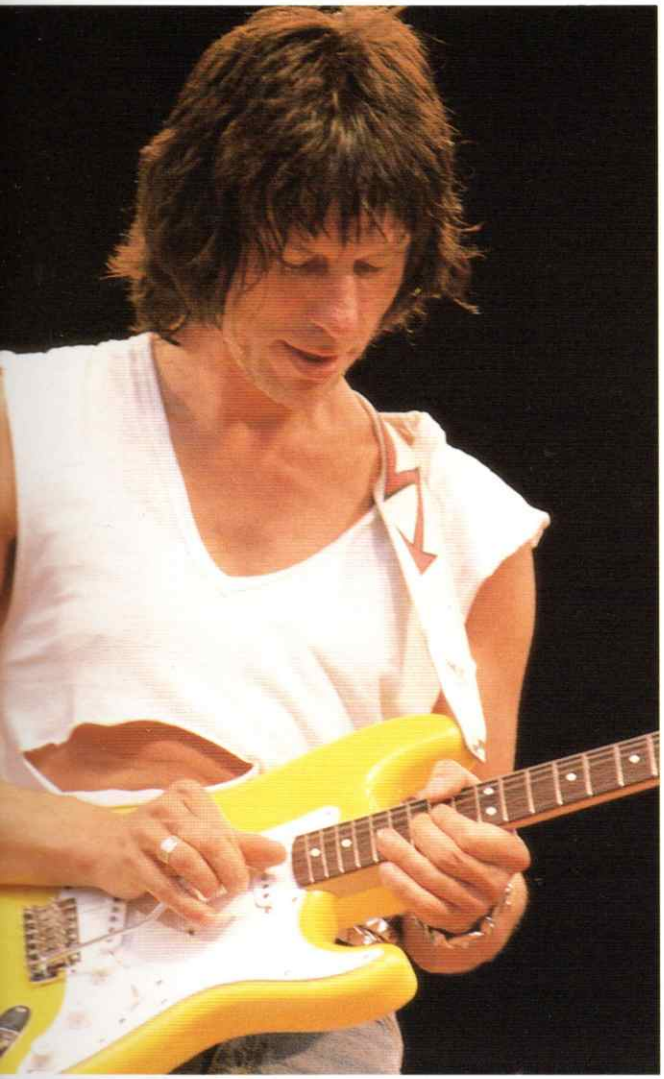
新作のライナーを頼まれテープを受けとった時は、正直言って少々不安だった。ヤン・ハマーとの腐れ縁が続いていてフュージョンしてたりジャズに走っていたらどうしよう、オジン臭くアコースティックで地味になっていたらどうしよう、変にオールド・ウエイヴなハード・ロックをやっていたら嫌だな、などと余計な心配をしてしまったのだ。何しろ、4年も音信不通だったのだから、彼の内面でどのような変化が起きているか解らない。恋人どうしでも、4年も会っていなければ、相手がどうなっているか想像つかないだろう。

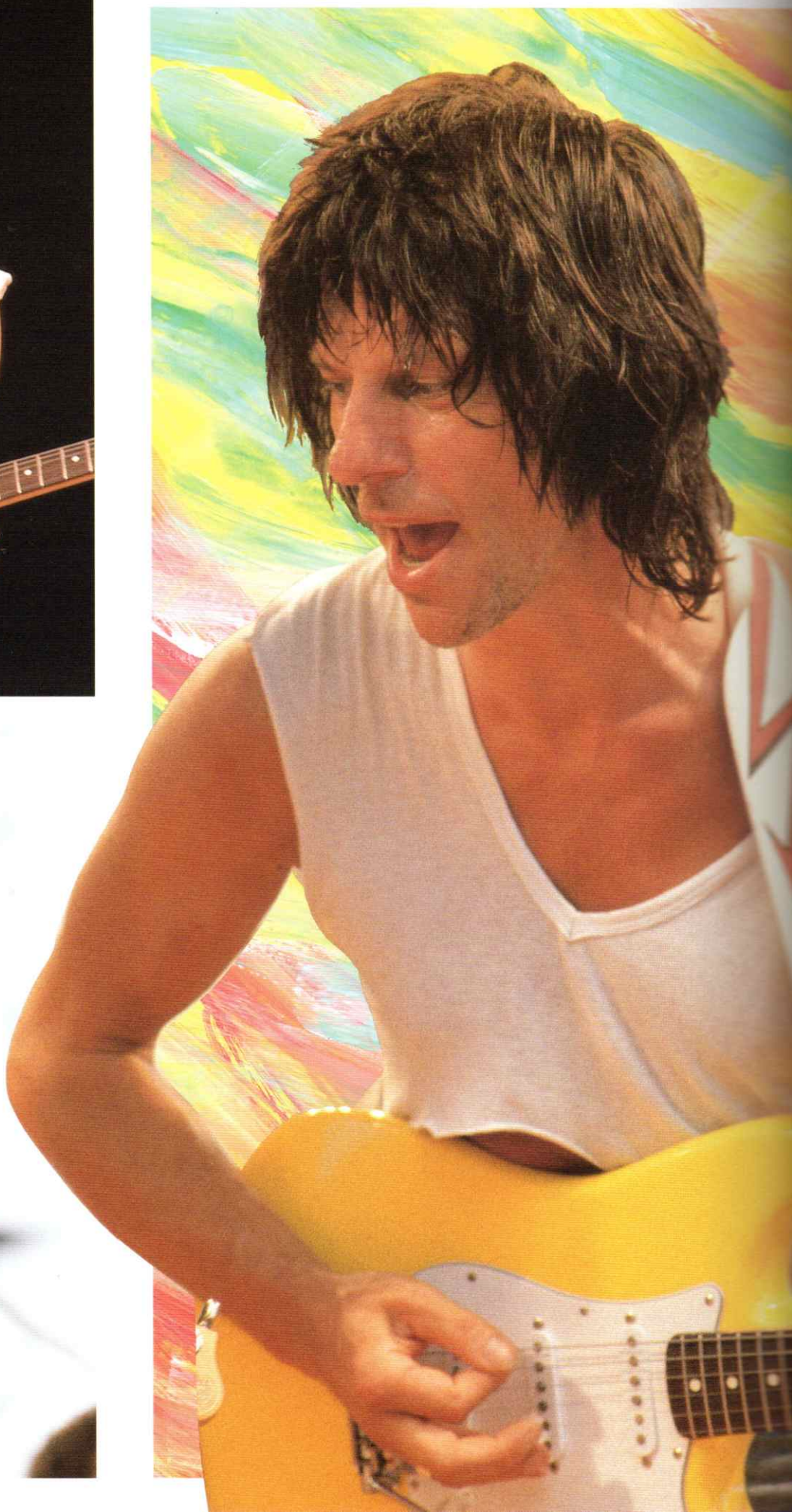
このコンサートに来ているベック・ファンならば当然聞いているだろうが、ベックの新作は僕の心配など無用の、実に素晴しい作品に仕上がっていた。彼の基本的なスタイルと美意識は一貫していながら、しっかりと時代の変化にも対応した音を見事に作りあげてくれた。きょうのステージでも、それを十分に聞かせてくれるだろう。

ジェフ・ベックの魅力は、彼のギター・ダンディズムともいえる美意識だ。彼のルーツはブラック・ミュージックであるが、ブルースやR&Bといったひとつのスタイルに対するこだわりはない。だから彼をブルース・ギタリストであるとか、ハード・ロック・ギタリストであるとか、ひとつの音楽ジャンルの中に閉じ込めることはできない。最近はフュージョンやジャズといった項目で登場することがアメリカの雑誌などでは多いが、彼は絶対にそんな所には居ないのである。あくまでベックはロック・ギタリストであるし、ベック・スタイルとしかいいようのないギター・スタイルを持っている。それは、今や古典的ともいえるロック・ギタリストのダンディズムに裏打ちされたスタイルなのである。80年代も終りに近づく現在、そうした古典的なギター・ダンディズムを保ち続けている人は本当に少なくなってしまった。バンドのギタリストでいうならばキース・リチャーズという巨人が残っているが、ソロのギタリスト、しかもインストだけで勝負している人としては、唯一ジェフ・ベックだけではないだろうか。では、そのギター・ダンディズムとは何かというと、これがなかなか表現がムズカシイ。解ってもらえるかどうか不安だが、例えばくわえタバコでうつむきながらギターを弾く姿の美しさ、それを究極の美と考えるような美意識である。今や流行らなくなった感じもするが、やはりロックという音楽の持つカッコ良さのひとつの典型がそこにあるような気がする。

そして無論の事、その姿にふさわしい音があるわけで、まさにベックの攻撃的でありながら適度にウエットで、ロッタ・ギターらしい音色を持ったプレイは理想的なのだ。ベックの新作を聞いた時、思わず僕は「これだよ、これ」と叫んでしまったが、こうした感想を持った年季の入ったロック・ファンは多いはずである。そしてベックが偉いのは、そうした古典的な美意識を保ち続けながらも、決して時代の音から遊離しないところだ。古典的だが古臭くないのだ。これは彼が常にコンテンポラリーなブラック・ミュージックに対する目配りを忘れないからである。何もシーン全体に目配りをして流行の音を気にしなくても、ブラック・ミュージックの先端さえ見ておけば、ポップ・ミュージックの方向を見誤ることはない。その辺もベックは長い経歴の中で学んだのである。そして、この傑作アルバムをものにし、こうやって僕らの前で素晴しいプレイを聞かせてくれるのである。

彼にとって4年のインターバルは問題ではないのだ。やっぱりロック歴5年や10年のガキとは違うのだ。





NO1

BAD ENGLISH

JOHN WAITE
Vocals

NEAL SCHON
Guitars, Vocals

JONATHAN CAIN
Keyboards, Vocals

RICKY PHILLIPS
Bass, Vocals

DEEN CASTRONOVO
Drums, Vocals

JOHN WAITE ジョン・ウェイト(Vo)

NEAL SCHON ニール・ショーン(G,Vo)

誰の名義でもない、考えられうる最高のバンドを、そしてライヴもできるパーマネントなバンドを――というコンセプトに基いて結成に至ったバッド・イングリッシュ。

メンバーは、ジョン・ウェイト（Vo）、ニール・ショーン（G）、ジョナサン・ケイン（Key）、リッキー・フィリップス（B）、ディーン・カストロノヴァ（Ds）の5人。

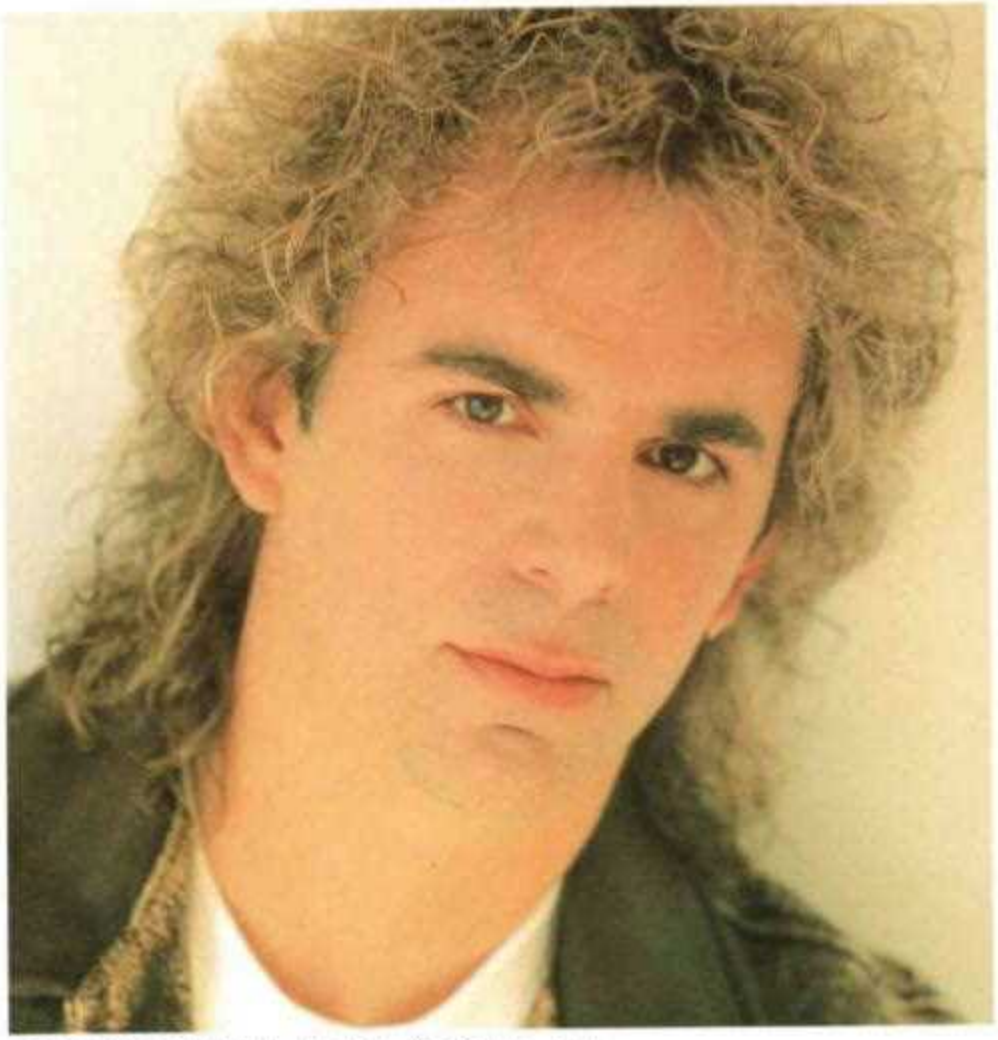
1970年代後半に活躍したイギリスのバンド、ベイビーズのヴォーカリストだったジョン・ウェイトは、バンド解散後も、ベイビーズの活動の拠点だったアメリカに留まりソロ活動を展開した。彼は「ミッシング・ユー」の全米ナンバー・ワン・ヒットなどの実績を残した後、思うようなバンドを組めないまま、88年の夏を迎えたのだった。

その頃、ジャーニーの活動休止によって活動の場を求めていた、ベイビーズ時代の同僚ジョナサン・ケインもミュージシャンを探していることを知り二人は意気投合、ジョンはジョナサンの住んでいるサンフランシスコにアパートを借り、2人で曲作りを開始した。

そして、ジョナサンの家から5マイルの所に住む、自身のアルバムを制作中だった、元ジャーニーのニール・ショーンが、たびたび2人の曲作りに顔を出すようになり、"誰の名義でもない考えられうる最高のバンド"というコンセプトに賛同し、このプロジェクトへの参加を決意したのである。

この3人に加えて、ベースにはジョン、ジョナサンと共にベイビーズに籍を置いていた旧友のリッキー・フィリップス、そしてもうひとりワイルド・ドッグズ、トニー・マカパインのバック・バンドを経て、西海岸で目覚ましく活躍しているドラマー、ディーン・カストロノヴァを迎え、バッド・イングリッシュの現ライン・ナップが完成した。

こうして、90年代のアメリカン・ロックを築くべきスーパー・バンドはデビュー・アルバム『バッド・イングリッシュ』を携え、動き始めたのだ！



JONATHAN CAINジョナサン・ケイン(Key,Vo)

RICKY PHILLIPSリッキー・フィリップス(B,Vo)

ロックの王道を歩む、スケールの大きいスーパー・バンド

和田 誠
Makoto Captain Wada

JOURNEYの復活か、それともBABYSの再編成か――今、全米を揺るがすスーパー・バンド・ブームの頂点に立つBAD ENGLISHが早々と来日公演を決めた。

メンバーは、ニール・ショーン（G）、ジョナサン・ケイン（Key, G）、ジョン・ウェイト（Vo）、リッキー・フィリップス(B)、ディーン・カストロノヴァ（Dr）といった英米混成のスーパー・ミュージシャンたちだ。そのスケールの大きさは、並いるスーパー・バンドとはケタちがいといえるだろう。

ニール・ショーンは、今さら説明の必要もないほど、70年代からSANTANAやJOURNEYを通じて日本のファンにはなじみ深いギタリストである。またジョナサン・ケインにしても、後期BABYSの来日公演、さらにJOURNEY加入後も、アルバム『ESCAPE』の全米No.1に貢献するなど、その活躍は幅広く知られているところだ。一方、ジョン・ウェイトは、70年代中期、ブリティッシュ・ハード・ロックの新星として注目を浴びたBABYSのオリジナル・ヴォーカリストであると共に、ソロとしても「Missing You」のビッグ・ヒットを飛ばしたシンガーとして御存知の方も多いかも知れない。リッキー・フィリップスは、BABYSが活動の場をアメリカへと求めた後期に参加し、アメリカン・ロックのフレーバーをバンドに注入したベーシストである。唯一、JOURNEY、BABYSの血筋を引かないディーン・カストロノヴァは、ハード・ロック・バンド、WILD DOGSやトニー・マカパインのバックでエナジックなプレーを聴かせ、若手では将来を嘱望されているドラマーだが、BAD ENGLISH結成と同時に白羽の矢が立った逸材だ。

こうした彼等のキャリアを見るにつけ、BAD ENGLISHがブリティッシュ、アメリカと、双方のマインドを内包しているのはもちろんのこと、そのルーツがハード・ロックにあるというのがよく分る。

しかし、彼等の長いミュージシャン生活の間に、ハード・ロックのエッセンスが、あくまでベーシックなファクターになっていったことはBAD ENGLISHのサウンドが証明している通りだ。その熟練した音作りは、ソフィスティケイトされたマイルドな感性を持つアメリカン・ロックの王道を歩むものだと言っても過言ではない。リキみを一切感じさせないナチュラルなロックが、彼等のキャリアと実力に裏打ちされていて爽快感を生み出す。ジョン・ウェイトのヴォーカルは決して力強くないものの、じっくり歌い込むスタイルは、BAD ENGLISHの目指すロックにピッタリとマッチしていて味わい深い。

ニール・ショーンのギター・ワークもテクニックだけにつっ走った70年代と違い、円熟味を増してオーディエンスをリラックスさせる。しかし、ソロ・アルバムの流麗なプレイと異なり、ロック・バンドのギタリストとしてのパッションは失っていない。「BEST OF WHAT I GOT」「TOUGH TIMES DON'T LAST」「LAY DOWN」といった、JOURNEY後期を彷彿とさせるナンバーの中でも、持ち前のウルトラ・ギター・テクをさり気なく披露してくれる。このコンサートの見所としても、このあたりのニールのプレイがひとつのポイントとなるだろう。しかし、BAD ENGLISHは曲を聴かせるバンドだ。JOURNEYやBABYSにも通じるメロディアスなロックは、HR／HMファンのみならず、多くのポップス・ファンにもアピールするものを持っている。そこを十分に堪能して欲しい。

JOURNEYとしては6年、BABYSとしては10年ぶりの日本の地だ。この年月にふさわしいベテランらしいプレイを期待できることは間違いない。彼等によってロックの奥深さを我々はまた思い知らされることになるだろう。

VE LUKATHER BAN

STEVE LUKATHER
Guitars, Vocals

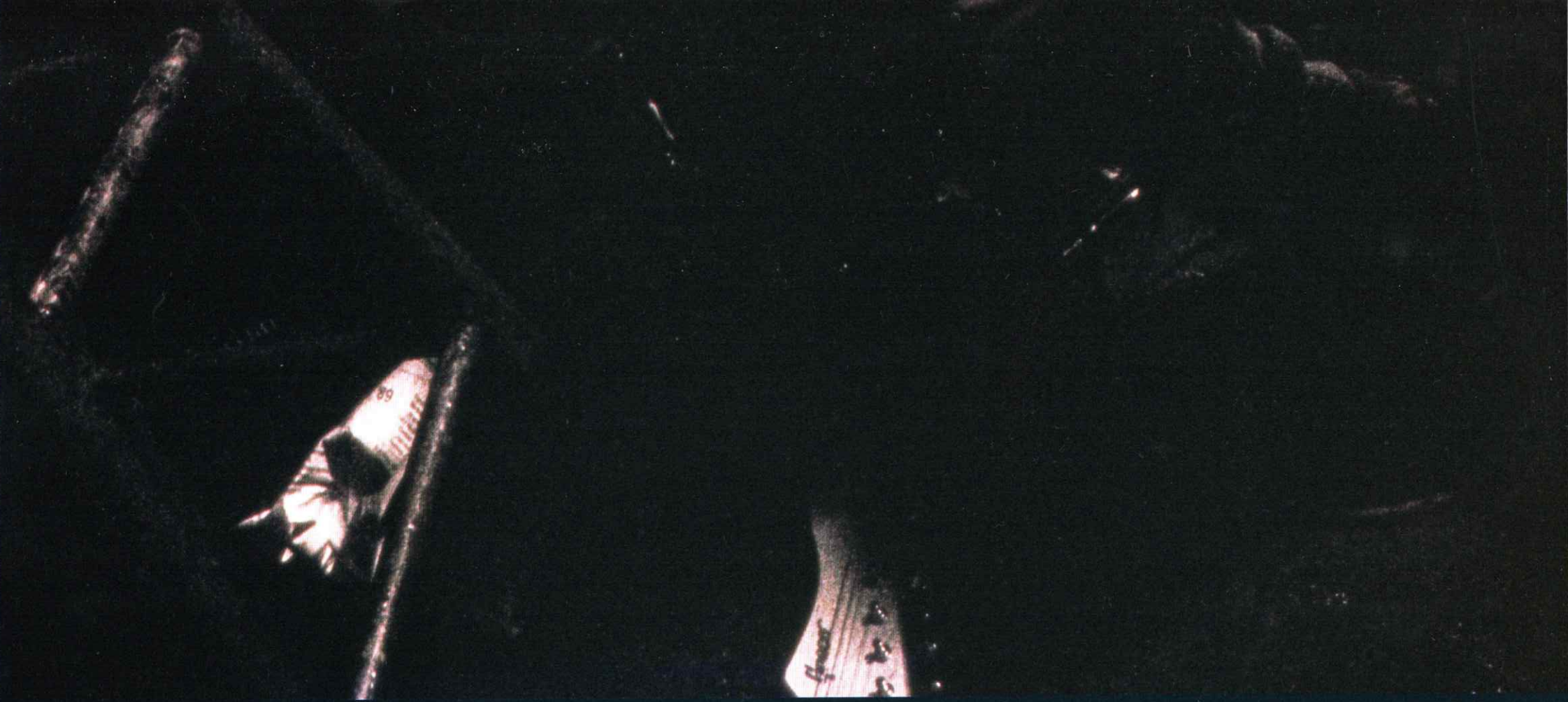
JOHN PIERCE
Bass

JOSEPH BRASLER
Guitars

JOHN KEANE
Drums

WARREN HAM
Horns, Background Vocals

JEFF DANIEL
Keyboards



STEVE LUKATHER

スーパー・グループ、TOTOのギタリストとして、またウェスト・コーストを代表するスタジオ・ミュージシャンとして、素晴しい才能と天才ギタリスト振りを発揮しているスティーヴ・ルカサーが、この夏に初のソロ・アルバムを発表すると共に、自身のバンドを率いて初のソロ・パフォーマンスを日本で披露する。

ノース・ハリウッド生まれで、ジミ・ヘンドリックス、エリック・クラプトン、ジェフ・ベック大好き少年だった彼は、7歳の頃から近くのギター・ショップに出入りし、ギターに魅せられる。11歳の時には早くも初のスタジオ・ワークを経験し、16歳から本格的にギターの勉強を開始。基本テクニック、ジャズ理論等を学び、基礎を築き上げ、栄光の音楽人生をスタートさせる。

高校時代にスティーヴ・ポーカロと会い、バンドを結成。LAを中心に活躍を始め、ボズ・スキャッグスのLP『シルク・ディグリーズ』への参加とツアーに同行したのがきっかけで、一躍ギタリストとして注目を浴びる。そして、77年にジェフ・ポーカロ、デヴィッド・ペイチらとTOTOを結成し、名ギタリスト、ヴォーカリスト、作曲家として手腕をふるう。現在までに7枚のアルバムを発表済みで、アメリカン・ロックを代表するバンドとして君臨している。

またスティーヴはグループ活動と平行して積極的なセッション活動を行ない、数多くのスーパースター達のアルバムに参加。セッション数は500回以上にも及ぶという。そして、今までの音楽キャリアの集大成とも言えるソロ・アルバム『LUKATHER』を8月初めに発表。自分のルーツに戻り、思う存分ごきげんなロックを聞かせてくれる。

才能豊かなギタリストとして、真価を発揮するスティーヴ

天辰保文
Yasufumi Amatatsu

もともと、ぼくは、ギターという楽器が好きなほうだ。ドラマーやキーボード・プレイヤーなど、ギター以外の楽器を演奏する人たちに比較すると、ギタリストに魅力を覚える場合が多い。楽器や器材について、詳しく知らないので、ひょっとすると、これは、ぼくの思い過ごしかもしれないけれど、ギターという楽器は、最も原始的な楽器だというイメージがあって、それだけに、その楽器を操るミュージシャンの人柄なり、才能なりが装飾なしにでてくるし、ぼくたちの楽しみの根幹も大きいような気がしている。

言うまでもなく、スティーヴ・ルカサーは、現在のロック界を代表するギタリストのひとりだ。TOTOの看板ギタリストとして活躍するばかりか、マイケル・ジャクソンを筆頭に、数多くのセッションで、素晴らしいプレイを披露し続けてきた。そういう彼を見ていると、ギターをプレイすることが好きで、好きでたまらないのだなと、つくづく思えてくる。逆に、それが、節操のないスタジオ・ミュージシャンのような印象を与えることも少なくないことも確かだ。

そもそも、TOTOというバンド自体が、そういう誤解を背負ってスタートしている。バンドが誕生したときから、既に人気スターのレコーディングに数多く参加していたことが最大の理由だが、各自が卓越したテクニックの持ち主であり、と同時に、ロック、ソウル、ジャズと、いろんな音楽性を身に着けていたことなどが、そういった印象を強めることになった。

実際、あくまでも前向きに音楽と向かいあう姿勢、その際のケレン味のない意欲を前にして、唖然的なカラッとした気分に駆かされた記憶もある。と同時に彼らは、古典的なロック・バンドの流れを、しっかりと引き継いでいるバンドだ。むしろ、こだわりさえ感じさせる。そして、そういったTOTOのイメージは、そのまま、スティーヴ・ルカサーというギタリストに言えることでもある。この人の存在は、実際、それまでの、ぼくを興奮させるギタリストとは違っていた。それまでの、ギターという楽器が持つヒロイックな要素、それも、ある種の悲劇を伴った要素は、彼を前にして感じられなかった。

やがて、彼は、ソングライター、コンポーザーとしても台頭しはじめる。彼が、単独でソングライターとして、名前を見せるようになったのは、3作目の「ターン・バック」からで、「リヴ・フォー・トゥデイ」という曲だった。以来、彼は、バンドの中で、ソングライターとしての比重を大きくしていく。それも、徹底してバラードを書き続けた。「雲なる風」では、早くも、傑作「ホールド・ユー・バック」を生み出し、TOTOに新しい可能性を持ち込んだ。その後も、「ハウ・ダズ・フィール」、「アイル・ビー・オーヴァー・ユー」、「アンナ」というように、彼のバラードは、TOTOのアルバムには欠かせないものになっていく。

だから、ギタリストとしてだけでなく、彼の音楽性を含めた、そういった力量は広く知られるところだ。その彼が、先頃、初めてソロ・アルバム「ルカサー」を完成させた。それも、ダニー・コーチマーからエディ・ヴァン・ヘイレンまで、ロサンゼルスで活躍する第一線級のギタリストを揃えて、これぞ、ギタリストのソロ・アルバムだと言わんばかりの大迫力のアルバムだ。

そこでは、あのエディ・ヴァン・ヘイレンにギターを弾かせず、ベースを担当させている。そのいっぽうでは、3年前、日本でのジェフ・ベックやサンタナとの共演に相を赤らめ、人生最良の日だと言い切る。そういう人であり、ぼくは、スティーヴ・ルカサーの、そういうところが好きなのだ。このアルバムを機に、そして、今回の日本でのステージを機に、ギタリストとしての彼が、そのテクニックではないところで、もっと語られることに違いない。スティーヴ・ルカサーが真価を発揮するのは、これからではないかとさえ、ぼくは、思っている。

EMILIO

EMILIO CASTILLO
Tenor Sax, Vocals

TOM BOWES
Vocals

CARMEN GRILL
Guitars, Vocals

ROCCO PRESTIA
Bass

RUSS MCKINNON
Drums

NICK MILO
Keyboards, Vocals

LEE THORNBURG
Trumpet, Vocals

STEVE GROVE
Tenor & Alto Sax, Vocals

STEPHEN "DOC" KUPKA
Bariton Sax

GREG ADAMS
Trumpet, Flugelhorn

CARMEN

ROCCO

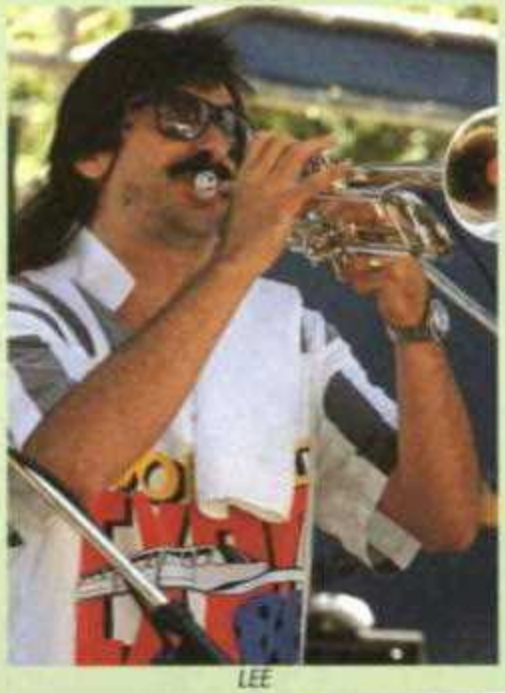
RUSS

GREG

TOM

NICK

STEPHEN


LEE

STEVE

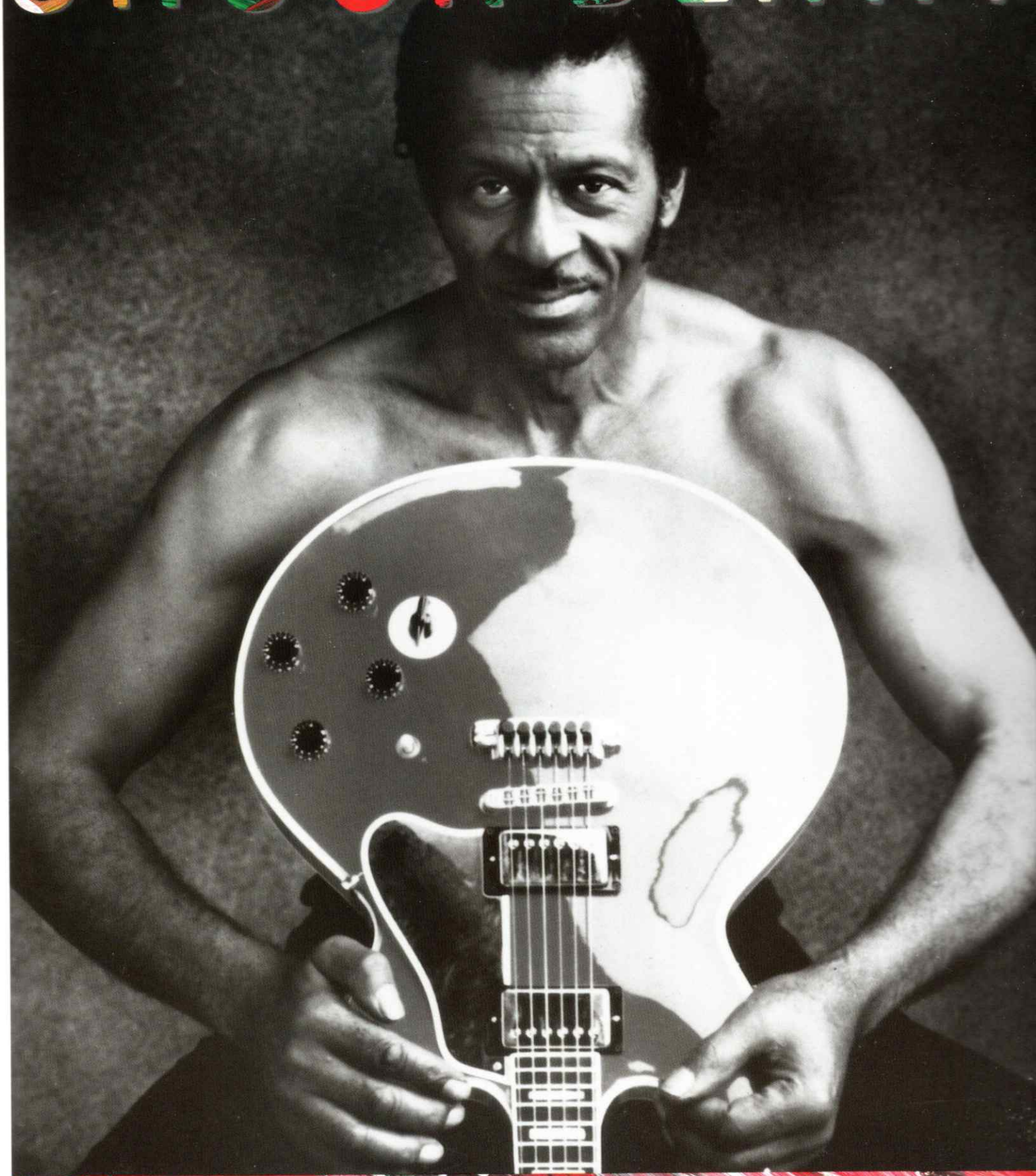
タワー・オブ・パワーは20年以上のキャリアを誇るベイ・エリアのベテラン・グループだ。近年、ホーン・セクションの5人がヒューイ・ルイス&ザ・ニュースへの参加で、話題を集めていたが、バンドとして再び活動を開始し、今回約14年振りの来日となった。

80年代後半に、エミリオ・カスティーヨを中心にサンフランシスコで結成され、ダンス・バンドとしてスタートしたタワー・オブ・パワーは、88年にレコード・デビューを果たす。72年に、TOP40入りした「ヤング・マン」を収めたアルバム「バンプ・シティ」、翌年には「タワー・オブ・パワー」を発表。この中から「つらい別れ」「ホワット・イズ・ヒップ」が大ヒットとなり、グループのサウンドを確立すると共に、世界的に名を馳せる。そして、81年の「DIRECT」までに11枚のアルバムを発表するが、以後は主だったバンド活動はしていなかった。

87年後半になって6年振りにアルバム「パワー」を携え力強くロック・シーンに復帰した彼等は、今も尚、強烈なホーンとリズム・セクションをフィーチュアし、持ち前のガッツとチームワークの良さでベイ・エリア・ファンクの心髄を堪能させてくれる。

TOWER OF POWER

CHUCK BERRY

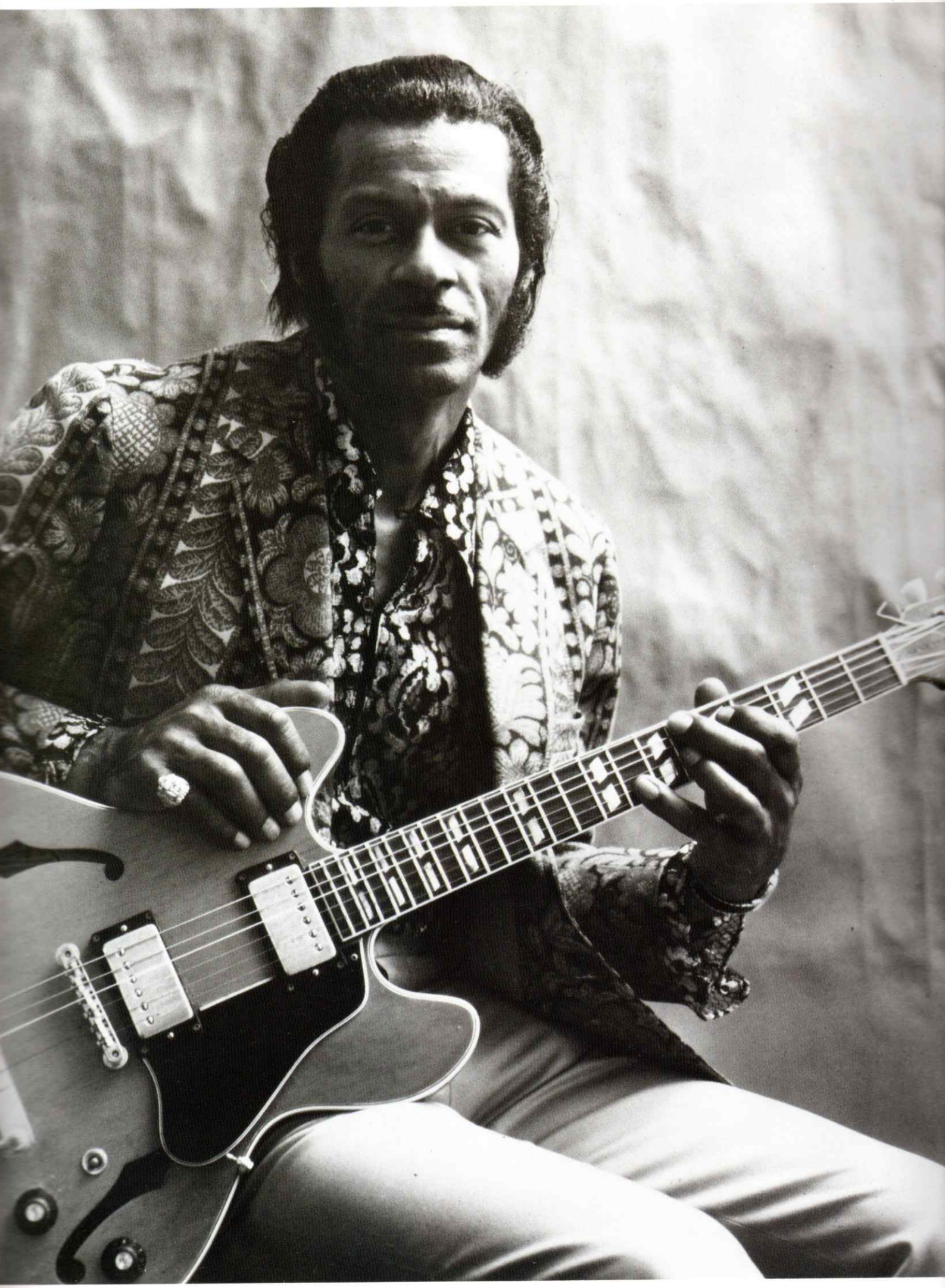


「ベートーヴェンをぶっとばせ」「スウィート・リトル・シクスティーン」「ジョニー・B・グッド」「メンフィス・テネシー」と数えたらキリがないほど、不朽のロックン・ロール・ナンバーを生み出し、ロックン・ロールの神様として今なお君臨するチャック・ベリー。彼の作品である「ロックン・ロール・ミュージック」をとりあげたビートルズ、これ又デビュー・シングルに「カム・オン」をとりあげたローリング・ストーンズを始め、時代を超え数多くのアーティストに影響を与えてきたチャックは、ロックの歴史を築いた偉大なる永遠のロックン・ローラーだ。

1926年、カリフォルニアのサン・ホセに生まれ、52年にチャック・ベリー・コンボを結成して活動を開始。55年にボ・ディドレーと出会い、彼の紹介でチェス・レコードと契約を交わし、同年「メイベリーン」でレコード・デビューを果たす。これが大ヒットとなり、一躍脚光を浴びる。続く「ノー・マネー・ダウン」、翌年の「ベートーヴェンをぶっとばせ」の爆発的なヒットにより、スターとしての地位を確立。それ以降も素晴しいR&Rナンバーを送り出していることは周知の事実だ。

又、これまでに数多くの映画に出演済みだが、87年にはチャックの功績を讃える自伝的な映画「ヘイル・ヘイル・ロックン・ロール」がキース・リチャーズの音楽プロデュースのもとに完成され、大きな話題を呼んだ。

すでに30年以上の音楽歴をもつチャック。ギターを抱えて片足で跳びはねて歌うトレード・マークのダック・ウォークは健在で、増々彼のロックン・ロールは磨きがかかっている。



RICHARD MARX
Vocals,Guitars

JON WALMSLEY
Guitars

PAUL WARREN
Guitars

JIM CLIFF
Bass

MARK SCHULMAN
Drums

MIKE EGIZI
Keyboards

JIMMY ZAVALA
Sax

RICHARD MARX

Photos by Alan Silfen

「サティスファイド」を全米No.1に送り込んだ、90年代のアメリカン・ロックのニュー・ヒーロー、リチャード・マークス。

デビューは1987年。シングル「ドント・ミーン・ナッシング」、2ndシングル「君を知りたい」、3rdシングル「エンドレス・サマー・ナイツ」そして全米No.1に輝いた4thシングル「ホールド・オン・トゥ・ザ・ナイツ」と、たて続けにヒット曲を放ち、新人らしからぬ活躍を見せたリチャードは、87年度グラミー賞にノミネートされ、またローリング・ストーンズ誌「最優秀新人男性ヴォーカル」他、多くの賞を獲得している。

'88年2月には初の来日公演も実現させ、全世界では200以上の公演を挙行した。またアン・ウィルソン&ロビン・ザンダー、ヴィクセン、アニモーションなどに曲を提供するなど、コンポーザー、プロデューサーとしての才にもたけた逸材でもある。

89年に発表されたセカンド・アルバム『リピート・オフェンダー』では、よりエッジの効いたハードなサウンドを聴かせてくれる。

1stシングル「サティスファイド」の全米ナンバー・ワンを機に、リチャード・マークスは彼の持つ若さ、才能、実力で、トラディショナルなアメリカン・ロックを、もっともっと堪能させてくれるはずだ。

UDO ARTISTS PRESENTS

IN COMMEMORATION OF THE 20th ANNIVERSARY

KIRIN "BEER'S NEW GIGS" '89

JEFF BECK GROUP

(with TERRY BOZZIO, TONY HYMAS)

BAD ENGLISH STEVE LUKATHER BAND

Aug. 5th & 6th

TOWER OF POWER

SPECIAL GUEST Aug. 9th, 10th, 11th & 12th

CHUCK BERRY

SPECIAL GUEST Aug. 12th

RICHARD MARX